樊雲餘聞 第八

15
1560
7

門 1 5
號 1560
卷 7

昭 年 月 日
氏 贈

37 5550

慶應義塾大學圖書

也爾
馬
比之

雪雪餘

第八

昭和 年 月 日
氏 贈

目次

第八 航西紀行
一 緒言
一 送テ新橋停車場ニ至リシ諸子

螢雪餘聞

第八 航西紀行

1940 (昭15)
十月 (大) OCT.
日 月 火 水 木 金 土
1 2 3 4 5
6 7 8 9 10 11 12
13 14 15 16 (仏) 18 19
20 21 22 23 24 25 26
27 28 29 30 31
S M T W T F S
(丁亥) (ひのと)
月 ORDER 1 DAY 曜
伊東屋製
No. 74 20…20…400

第一航西紀行

目次

一　緒言
一　送テ新橋停車場ニ至リシ諸子
一　送テ横濱ニ至リシ諸子
一　送テ本船ニ至リシ諸子
一　航西紀行
一　航海里程
一　送詞

中原

富士櫻印オカモトヤ印行

(12 × 25)

伊東屋製
No. 74 20…20…400

本文
12ポ

四号

「白雪餘回□沖ル

七字下ル　結言

一此一巻ハ全ク航西紀行ヲ以テヲヨミタス

作ル人アリ云フ子ノ紀行ハ文章ニ修飾ナ

ク語辭煩ル繁ニ涉リ甚タ見ルニ厭フヘク

ハ之ヲ修正スヘシハ全ク蕪ヘテ口ラ全

ハ虛飾ヲ好ム者ニハ非サル全ハ蓋シ

語辭ノ形容ニ過キンヨリハ紀要ノ漏脫セ

サランヿヲ欲スルモノ故ニ部分ノ飜

ヲ稿好スル豔麗ノ彩筆ニ以テ

三字下

大漏サスヿヲ記セハ実ニ佳ナリト全

ハ元ヨリ文章ニ巧ナラス巧ナラサルノ

文章ヲ以テ世ニ精巧ニ擬セントスレハ反

テ虎ヲ画カントスル猫ニ類スルノ誚リヲ

免レサルヿシ全カ一点ノ修正ヲ加ヘサ

ルハ蓋シ此意ニヨルト

一道別法君ノ名ヲ記スルハ永ク法君ノ好意

ヲ忘レサランカ為メナリ

五字下

送テ新橋停車場ニ至リシ者ヲ

明治四拾壱年　忠順　戎瀬正肥　大岡忠敬　竹屋老富

九条道実　二条基弘　吉田良義　鷹司忠礼（禮）
勘解由小路資承　徳川慶孝　前田利嗣　裏松（松木）
良光　冨小路三雄　井伊直憲　徳川茂義　松
平康民　伊達宗徳　長谷新祁　海江田信義
高崎正風　金子堅太郎　南郷茂光　多賀章人
和田金太郎　岩谷忠順　渥美久四郎　富永
雄吉　安藤信吉　仙石盡　中村吉郎　香月崇
義　村井恒　河端誼益　芹沢孝太郎　佐藤八
太郎　松平如義之　藤林健太郎　関警　宗
藏　加藤弘二郎　高倉作太郎　鬼頭源之助

戸田康民　戸田安盈　竹村石友　松嶋虎之助
蘭廣　川上大吉　橋村正環　安藤信太郎
蘭方憲
戸田忠幸　中嶋六藏　奥村常紀　鷲羽宗岳
佐藤三宅庄市　河野恕之郎　河藤莊　小西正義
藤堂家使　伊東某（九條家侍者使）　手塚某（大谷家使）　青木宣通（島津家使）　松山
忍明岩盤井光（熊澤家使）　上嶋
山陽宮使　小栗勇馬（前田利者使）　倉信勝（徳川家侍者使）　有馬紀田（有馬家使）　牧宣田
平井正太郎（球野家使）　高橋俊美（吉井家使）
敷多章之　植田宗太郎　一ノ矢藤太郎　其他
脱カナカラサル人

銀座　伊東屋製
No. 74 10×

立ちて送り横浜に至りし諸子

伊達兼昭　同英麿　柳原前光　岩倉具定　西園寺公望　松平信正　伊達宗基　北白川宮能久　常盤井宮恒久　鮫島武之助　矢土勝之　村山通宣　河原田盛美　真野秀雄　矢吹嘉一　北川七郎　八木橋雲山　佐藤清江　神威盛苗　齋藤連　加藤恒忠　前田利嗣　市原基孝　三条家使基徳　大寺家使某

立ちて送り本船に至りし諸子

広幡忠朝　佐藤友太郎　早川嘉儀　戸田如一

永田直清　石川三義　松島剛　鳩猪　松井邦武　同秀　高橋信言　谷具太郎　佐藤義孝　小川共枝　神原信正　櫻庭　尚ほ家に帰て送別の意を表せん者　又　右日三条公觀桜の宴に聘せらるるを以て　来り送る人数多あり　金

其好意を思いサルに非サレば其数の多キニヨリコヽニ載セス　然レに　金　共宴終日ヲ心に記メ忘レサル

銀座　伊東屋製
No. 74　10×20

別頁ト入レル

注意

航西紀行

余カ欧州行ヲ企つル此ニ年アリ来タ毎テ世機会ニ遭遇セス帝ニ遺憾トスル所也ニ牡ニ一別我寂ヲ庫セスんノ時期至リ明治十八年四月十八日ヲ以テ我東京ヲ発スんノ了トハナリメ是レ実ニ余カ二十二歳ノ時ナリ

四月十八日天晴朝発スんニ及ヒテ朝来ノ雨セラレシモ一条総ヲ同辰子廣嶋朗子老蘭ノ方ニ返ヒ行ス其他男女ノ家人等ニ暫時ノ別ヲ告ケ老厳石崔公ト共ニ北村糾之野範温玉井三代野豊浦ヲ除ヘテ新橋停車場ニ赴ク時ニ四時ナントトス送テ此ニ至ル者親戚故旧ヲ合セテ九十余名余諸子ニ「決別ノ意ヲ述ヘ互ニ無変ノ再会ヲ語ん」忍ヒ別ノ発ヲ告ん者アリ乃チ老厳石其他ノ諸氏ト袂ヲ分チ四時四十五分ノ列車ヲ以テ東京ヲ発ス中ニ鮫島武之助廣惜忠朝盤常井崔松池田頼秀一条実蛟君ノ使者市原某前田利制使者加藤某其他二十余名余ヲ横浜ニ送ラントス同列車ヲ以テ東京ヲ発ス既ニ横浜ニ至レハ伸輕来昭同英麿其家

銀座 伊東屋製 No. 74 10×20

臣ハ本橋雲山神盛苗佐藤清江外崎、丈人齋藤連
及ト我家人御山豊等失ツアリ以テ余ノ到ル
ヲ待ツ豊ニ於テ旅店津久井屋ニ投ス伊達
宇基佐藤友太郎等後レテ至ル又桝谷前光西
四辻ノ筆者金具庄太郎ハ遠別ノ意
ヲ述ヘカハニメ去ル余ノ廣島渚氏ト別
盃ヲ酌ク恋ニメ隣房一人ノ陽関ノ曲ヲ唱シ衆
声之ニ和スルアル間ク曲止ンテ快談肚吟数ル
愉快ナルモノハ如シ翌ル友決ル我行ヲ
祝スル又一室低声微語憂フルカ如ク喜フ

カ如キモノハ旧家臣ノ別ヲ惜シムカ如ク夜闌辞
メ各家ニ帰ル者ナ餘人ハ報スルモノアリ
曰ク佛船だんが早明日七時出帆ナリシニ九
時ニ屋延セシト余共前約ニ違ヒシヲ怒レル
声如何トモスルノウス十一時寢ニ就ク
十九日晴快晴午前五時蓐ヲ出テ朝飯ヲ終テ西
国寺分使ノ旅泊佐野茂ニ至ル遠別ノ人紳士
官吏ヨリ藝妓幣用ニ至ル迄ナ数人座ニアリ談
笑少時小流船準備整フヲ告ク直ニ分使ト疑
廳備付ノ手当ニ同来英吉利波止場ニ至リ乞

別紙

船ニ乗レ〈忽ニメ本船ボルガ号ニ達ス〈ハ七時三十分也〈序列ノ渚ル金等ノ船中ヲ一覧メ袂ヲ分テ去レ〈金元ヨリ積年ノ宿志ヲ達セレフナレハ心ハ快ニ堪フレ共故国ヲ去ンノ悲嘆ハ量シ人情ノ免レ得サル所ナレハ家ヲ出シ時老母ニ分袂セシ時及ヒ船中ニテ渚ル之分レシ中ハ実ニ心細ク寂ヘタリシ

別

国郵

ハルガ号ハ佛郵船ニテ共同三菱ノ丸ト共大サニ大異ナシ〈速力ハ一時間十一英里ト云フ〈此四ノ一行ハ西園寺公使書記生宇野作

弥

夢族細川護文其使津田静一山縣有朋氏ノ息孫

村

狐狸馬友ヒ金ニ〈皆双眼鏡板取出シ彼方此方打見ヤル中ニ船ハ抜錨シタリケリ〈之ヲ午前九時トス〈元ヨリ時朝ノ天気メニテ微風ダニ非サレハ船ハ湾ノ中ヲ走ルカ如ク湾ヲ出テ次ニ伊豆相模灘ニハ丈其他ノ諸島ヲ眺メ思ヒテ駿壹ノ漢ヲ過キシ頃ハ午後二時金ナリシカ凡所々景ヲ波浙々高ク同室宇野氏ノ如キハ已ニ室内ニ居ラメ出テス〈金方堪ヘスメ室ニ入ル〈夜ニ入リ風波ノ動揺頗ル甚シ〈金臥

銀座 伊東屋製
No. 71 10×20

庫ニ上ト出モ読書センニハ室内暗黒談話セントスルニ口ヲ開ケハ喧嘩セントスル程ニ閉テ眠ラントスレハ忽チ故山ヲ慕フノ念勃々トシテ止マス〈夜半過迄眠ラサリシカ翌日接客ノ疲レニヤ思ハス暁前ヨリ一睡シタリ

別行

二十日〈月曜〉〈晴〉〈排暁ヨリ風雨益劇シク波ハ甲板ヲコヘ海水窓ヨリ入テ器物ヲ毀チ新揺籃ハ甚シク〈皆厨房ノ室ヲ失テス〈ガルソンノ使ハ来テ食堂ヲ勧メンモ余等只ノ一口ト答フルノミ〈又一段ヲ発セス〈午後風浪静カニナリヌ〈

別行

蓋シ此新揺籃ハ四周ノ沖ヨリシテ云フ

二十一日〈火曜〉〈晴〉〈海上穏カ〈皆甲板ニ出テ俳徊ス〈左ニ遠ク霧島山ヲ望ミ日向大隅ノ海岸掌上ニ在ルカ如シ〈尤ニ馬毛煙子ノ二島ヲ望ミ〈絶景堂ヲ〈使行一時間ナラスシテ佐多岬ヲ越ヘテ右ニ鹿嶋湾ヲ見ル〈有名ナル海門獄ヲ遠ク望ミ見ヘタリ〈之ヲ過クレハ我日本ノ地ヲ見ルヿ能ハサレハ又前日思郷ノ念ナキ能ハス、〈心細クモ余ハ涙オシキ心地セリ〈暁ニ至リ初揺セリト雖モ亦前日ノ比ニ非ス〈夜半眠

鹿児

富士

銀座 伊東屋製

No. 74 10×20

ニ歩ク　今夜ニヨリ濤声ノ耳ニ慣熟セシモノカ
又疲労ノ為カ睡眠モイト易クナリヌ

別行
二十二日 6 水曜 曇 動揺止ママ　今日モ終日室ヲ
出ス　夜ニ入リ風波モ静ニナレル甲板上ヲ徜
徉セリ　四望快豁物ノ目ニ遮ルナク只明月ノ
中天ニ輝クアリ　彼阿部伸彦ノ三笠山ノ名吟
ヲ思ヒ出テイト良シ　良ヘタリ

別行
二十三日 6 木曜 曇 今日ハ動揺劇シカラス　甲板ヲ
徘徊シツヽ詩ヲ吟シ笑談ノ間ヲ消スルノミ
連日ノ気候恰モ香港ニ着ノ日ヲ待ツアルノミ

午後四時ニ至リ支那地方ヲ煙霧ノ中ニ見ル
蓋シ寧波ノ辺ナラントト云フ　此日ノ喜ビハ
コロンブスカアメリカヲ発見セシモ如クナト
思フ計リナリシ　夜半過眠ニツク

別行
二十四日 6 金曜 前夜ニ引キ続キ西ヒ浪暴ク恰モ十九日ノ
夜ノ如クナリシモ暫時ニテ暁前ヒスカドール
漢名澎湖島ニ着キヌ　同島ハ支那内地ト台湾
トノ間ニアル一島ニシテ平常ハ殖民セヌ所ナレ
ド清仏戦争ノ後ナレハ負傷人数ヲ本国ニ送ラ
ン為メ佛船ハ必ズ之ニ寄港スル　ト云フ

銀座 伊東屋製
No. 74 10×20

日本船ヨリ四十頭ノ牛ヲ載セたる〻〳〵蓋シ此頃ハ休戦中ナレは猶七艘ノ兵船停泊スルハ其食料ノ為メ神戸ヨリ蘭船セシメトミフ〳〵会ニ停泊中ノタナイス号ハ日本ニ向テ発セントストミフシ以テ早速家信ヲ書メシニ托ス〳〵西国寺公使クールベー将軍ヲ佛国艦ベーヤードニ方向ス〳〵余本船ヨリ同島ヲ遠見スルニ即チ鹿島ノ集合ニテ所々ニ砲台ノ跡ヲ存スルアリ〳〵蓋シ清佛戦争ノ古戦場ナレハ〳〵其砲台ヤ築造ノ粗ナル笑フヘク感ムヘシ〳〵次テ清人ノ思フ知ルヘキ〳〵而メ已ニ佛国旗ノ所々ニ翻ヘルヲ見ル〳〵已ニ碧眼ノ占ル所トナリシヤ知ルヘシ〳〵怒レルヘキ〳〵然シ此我国モ隣邦地清治ニ西人ノ蹂躙食スル所トナル〳〵何ソ之ヲ対岸ノ火視ノ如ク却メ所ナランヤ〳〵唇亡歯寒ノ喩警シルヘキ〳〵此夜コヽニ碇泊ス〳〵此夜風強ク明朝出帆如何ト思フナリナリ

別行

廿三日晴午前九時四十五分香港ニ向テ出帆ス〳〵風ハ少シク静カニナリタレは浪頗ル暴ク皆堪ヘスメ室ニ入ル〳〵余独リ強イテ下ラス〳〵甲

板上只淨寂二名ト余トノミ動揺益ス烈シク
椅ヲ持ッテ倒レ〻ンフミ四ツ余モ亦堪ヘス人室
ニ入レリ午後遠モ平カニナリヌ伊東氏
来テ曰ク明日十二時香港ニ達ルト余未タ之
ヲ信セサル代西ヒ浸ヲ繰イテ曰ク出帆ノ
際ハ風ニテ三十六時間ヲ費スヘカリシモ今
猶ホ順風ニ変ニタレハナリ蓋シ船長ノ法
リシ所ナリト余望外ニ出タレハ共喜ヲ知ラ
ヘキ甲板ニ出テ海上ヲ徘徊ス夜ニ入リ月
明カニ風凪ク恰モ秋天ノ如シ爽快極リナク

別紙

今朝ノ困難モ全ク打忘レタリ
廿六日曇
快晴海上穏ニ平穏ニ朝飯ヲ終ル吹ヶ
ムミスセール長崎ヨリ香港ニ煙霧ノ中ニ見
ルヘシト皆起テ三ヲ望ム幾モナクソ遠山
ノ所ノ十人ノ舟ノ布帆ヲ揚テ行クヲ見ル
大ニ我国漁人等ノ用フルモノニ異ナリテ珍ラ
シク十一時ノ比帆檣ノ林立スルヲ遠見ス又
壹ヶ所海峡ニ入ル左右共ニ山岳巍々ト
聳ヘ右ノ遠ク樹木鬱蒼ノ山又左ノ山
腹ヲ斬テ人家ヲ建テ三層五層ノ楼アリ昼所

謂香港ノ市街ト異ニシテ
領事館ハ蓋シ海ヲ出メ上陸ヲ促スベキ所ニ領事
田寅一ハ去日当港知事ヨリ晩餐ノ饗応アルニ
ヨリ出迎ハスベキ代理書記生菅川清次来迎スベ
又ハ同領田里田清次氏ハ漫遊中ニテ幸ニ目今
此地ニ在レト是又知事饗応ノ為メ来ラズ代
理随行ノ牧昌蔵氏出迎フベキ公使共懇勤ヲ謝
スベキ所氏又集会ニモ不刺ヲ婦テ出迎セサルヲ謝
セラルベキ時ニ支那土民ハ艇ヲ漕ヘテ来ラレテ
勧ムベキ甚タ厭フコトベキ或ハ叱シ或ハ打擲タ之
ヲ遠サケハ蓋流ニ乗テ上陸シ菅川氏ノ誘導ニ
テホンコン、ホテルニ投宿スベキホテルハ実ニ壮
大ナル建築物ベキ全等船中ノ小室ニ慣居セシヨ
リ直ニ此大廈屋ニ入リシフナレハ猶カニ身体
ノ延長センカト思ハレタリベキ又浴午食終リシ
次黒田町田二氏来訪スベキ又奥青輔モ来ラシ今
タ領事館ニテ晩餐ヲ呈スルニ付伺使ト伴者
ノ来臨ヲ乞フトベキ全等之ヲ謝スベキ此日安着ノ
電報ヲ在京ニ発スベキ午後四時輪車ヲ命ズベキ輪ト
ハ寝椅子ニ桃椅子付ケタルモノニ人ニテ之ヲ

荷ヲ領事館ニ趣ク路傍ニ人ヲ見ルニ髪ニ
挿ス花ハ人ノ市街ハ臭氣ニ堪ヘス俥ヲ車
夫ニ人力車ヲ引ヨリ輸ヘストテ衣服ヲ
ニ来タ兄サル所ノ花ノ如ク稚ニ路傍樹ヲ植ル
所多シ樹ハ一幹長ク枝ヲ生スレハ枝下ニ地
ニ付キ直ニ幹トナルモノ日ヲ領事館ハ数ル高
楽ノ地ヲ占メ清涼絶景賞スヘシ黒田氏其他
ノ諸氏ト談話ノ後日ヲ食餐ヲ応リ帰路散歩メ
帰ル明日ハ知事ヨリ使ト金ヲ招待セント
ノフナリ帰館メ家信ヲ書シ寝ニ就ク今宵
ハ波濤ノ眠ヲ侵スナク心易ク寝ル

別行

廿七日月曜 快晴 朝食ヲ終リ髪ヲ切リ髭ヲ剃ル
細川津田二氏家ニ市街ノ散歩ヲ促カス一
廻メ帰ル時ニ十二時ニ公使ニ今日ノ領事
館ニ趣キ領事ト共ニ知事ノ館ニ趣カント印
チ共ニ出テントスレハ轎夫蟻ノ如ク集リ去ラ
ス之ヲ鞭撻スレ共去ラス巡査来テ之ヲ鞭
撻ス漸ク蓋シ去日公使ト轎ヲ命メ散ス
欲ス館ニ趣キレヲ見タレハ使ハ領事館ニ至リ
直ニ黒田町田及ヒ書記生田辺ノ諸氏ト知事館

銀座 伊東屋製
No. 74 10×20

に至れく使令使出テ、言関に迎つく公使等ヲ
請フテ後室に至れく眺望絶佳く蓋シ此地景上
ノ地ヲ占むれ如シ〈建築モ華麗ニ失セス粗悪
ニ流レス最モ宜シく皆メ和蘭ボーエニ氏ノテ
礼スく代い齢九十六白肥大ニメ濁声能ク伊語
ニ通スく特ニ佐賀三名出来リ礼スく時ニ食堂
備ノ整フヲ告クく知蘭公使等ヲ誘フテ食堂ニ
入れく晝餐ノ際知蘭書地ノ内海ヲ一周メ見セ
レメントにく公使業ニ謝スく蓋シ午後四時
波止場ニ会セントノ約束アルく辞去ルニ及ンテ

知蘭帳簿ヲ出メく公使ト余ニ日本字ト漢字トヲ
以テ姓名ヲ記入セシムルく之ヲ書メ別
レテ領事館ニ帰リ暫ク時再ヒ輪ニ乗リ波
止場に至れく知蘭其他モ次イテ至れく日ハ既ニ
昏暮ニ乗メく向岸英清管轄境ニ至リ内海ヲ一周
メ上陸シ畢ニ於テ知蘭ト相分れく此日知蘭又
公使ト共ニ明日モ馬ニテ法所ヲ巡覧センメ
ントにフく余等直ニホテルニ帰れく此夜黒田
代理ト日郵船ニ搭メ上海ニ赴カントスく則チ
日本ホテルニ出テ領事館ニ赴キ夫ヨリ黒田

銀座 伊東屋製
No. 74 10×20

変迂

代ト波止場ニ至リ合浦ス〈其等ハテハ二帰ル
〈此夜暑気甚シ〈日如流汗ノ着テ納涼シ十二
時ニ至リ就寝ス

別行

今日市中ト内海トノ間ニ凡ソ其地勢ヲ見
ルニ元ト是レ僻遠ノ孤島ニ過ギサリシニ所
片支伊ノ為メ英国ニ属ヤシヨリ山ヲ截リ道ヲ
開キ今日ノ繁盛ヲ致セシモノナル此ノ層ハ
隔ヨリ高ク海面ヨリ見レハ数ヘ難キ数ノ山ヲ
以テ密ノ住居ニシテ海岸ハ多ク皮那人ノ住居
〈而メ英領ハ全島ト内地ノ部分トヲ占ム

〈此海ヨリ山嶺石標アルヲ見ル〈即チ境界ト
云フ〈此処ハ潮州トテ韓愈ヲ貶セラレシ所
〈一封朝奏九重天夕貶潮陽道八千〈潮陽ハ
即チ当地ノ事〈又有名ナル鰐魚ノ文アリシ
所ナレハ如何ナル僻地カト思ハレシカ今日ハ
戰艦商船港内ニ充チ市街ハ一大港場トナル
ノ観ニ云フ第四章〈海トナルト〈其変迂ノ奇
ナル驚クヘシ〈昨高ノ処ニ英国旗ヲ翻ヘレタ
リ〈之ヲ太平山ト云フ〈蒸船ノ出入ヲ報セ
シ者メト云フ〈航西日記ヲ見ル〈枚浦所謂山子

法アリ〳〵　缺金別作天英雄高唱太平顛雄図
鵜斧焚餘土、作此人家十万個トゆテ見ルヘシ〳〵
此地ニ洋服ヲ着ル黒帽ノサシク立烏帽子ニ類
スルモノヲ頂クアリ〳〵是レ或ハ波斯人ナラシ
カ〳〵　巡査ハ是亦半里ノ人ニシテ手ニ鞭ヲ持チ頭
ハ赤色ノ布ヲ以テ包ミ〳〵或ハ印度人カ〳〵人口
ハ総計十六万アリト雖モ支那人甚多キヲ占ノ
其他ハ黒白ノ人種ヲ合シテ十六万分ノ一ニ過
ト云フ〳〵土民ハ支那人ノ子ナレハ貪欲極リナ
ク利ト見レハ廉恥キ何モ厭フナシ〳〵裸体跣

是ノ者ト雖モ財産アルモノモアリトテフ〳〵甚
貧欲(欲飽)ク知ラサル見ヘキ如シ〳〵婦人ハ是ノ
小サナル子ノ知ル所ナレ共此地ノモノハ通常
ノモノヨリ多キカ如シ〳〵固ク所ニヨレハ上等ノ婦人
人ハ是小ニシテ下等ノモノハ大ナリト〳〵然レ
今見ル所ニヨレハ陝隘ニシテハ洗濯スル如
キ卑賤ノ老婆ヲ見ルニ甚タ五六歳ノ児ノ手ニ
ヒスヘキモアリサテ婦ニハ是ノ小サナルヲ多ク見
サルカ如シ〳〵之ニ由テ考フルニ今ノ老婆ノ若
キ時ニハ是ノ小サナルヲ貴ヒシカ年経ルニ随ヒ

No. 74　10×20　銀座　伊東屋製

労働ノ忙シキ不便ナルヨリ此風習ノ漸次ニ散レ独リ上等社会ニ存セルナラン

別ニ過キサレド或ハ此ノ如キノ理アラン此日土地風景土民風俗ノ写真一ニ葉ヲ購得タリ

廿八日 六月八日 曜日 晴暑気益々甚タシ

今日ハ鉄道会社ノ招待ニ応ジ一行ニ晩餐ノ約アリ十二時同盟会ニ至ル

諸氏少時食堂ニ入テ昼食ヲ終リ細川宇野津田藤井ノ四氏ハ帰リ直ニ会使ト同盟ノ

(八)午後四時前 室ヲ借テ午睡ス 眠正ニ熟スル已ニ起キ出レ乃チ輪ヲ命ジ会使ト政党

ニ赴ク 蓋シ四時同盟会合ノ約ナレバ

已ニメデタシ 知友伝使ヲ訪ヒ相携ヘテ

しい四時三分ヲ過ク 上山ヲ得ズ

帰リ宇野氏ニ托シ 刻セントヲ謝セシム

知友ノ性質ノ四角ナルヨリ一端ヲ穿ち

ヘ 暫ク知友伝使ヲ訪ヒ

ニ出テ去ル 会使帰リ来リ余等ニ謂テ曰ク

此地ニ来ル人必ス一度ハ支那制度ヲ食ス 今

夕華ニ同アリ 共ニ行カスト 余ト宇野氏トニ

応ジ三名ホテルヲ出ツ 会使云フ 割烹店

ハ杏花楼ヲ最トストイフ
皆ヲ大ニ面ノナラン
階段アリ登ルヿ数十級
不潔ニメ厭フヘシ
ニ人ノ占ムル所タリ
清人裸体ニテ来リ筆ヲ取リ「食飯」「飲酒」等
ヲ問フ皆悉リト答フ其價各一円
日本ニモ已ニ支那料理ト云フモノアリテ之
異ナラス只甚不潔ニ苦ム 半途ニ又之ヲ
トセレニ来テ「此美味何不食」ト書ス「金等」満
腹ノ二字ヲ書メ出テ去リホテルニ帰ニト再ヒ晩
餐ヲ契シタリ又後日ノ浅栖ニ供スヘシ
廿九日水曜 曇暑気甚シ 唯タ相集テ談話スル
ノミ 午後公使ト共ニ暫ク之ヲ知ル支銀ト銀
支銀ニ趨キ名刺ヲ投ス 終日又餘支ナシ 夜
ニ入リ公園ニ音楽会アリ 聞キ行カント欲セ
シニ軒雨雷鳴ニテ中止ス 雷雨共ニ漸ク八ケシ
クナリヌ ナ一時寝ニツク
三十日 日曜 雷雨 午前十時叶田領支田辺書記生来
シ ナ一時ホテルヲ発メ小蒸流ニテ佛郵船ナ
タル号ニ乗ル 此日風少ク暴ク小蒸流ノ動揺頗ル甚シク
本船ナタルニ乗移ル此ハ雷雨共ニ止ミヌ 扱ボルガ号
ハ横濱香港ノ間ノミニテ是ヨリハ前述ノナ

タル号ニテ航スル船ハ本船ハボンガ号ヨリ一倍大ナル船ニテ六七十回モアルトイヘドモ半船ハ香港ヲ後ニ見テ出帆ス此日正午寒暖計七十八度ヲ示ス（今日ヨリ連日ノ熱度ヲ記ス）

夜ニ入リ静ニナリ又今夜ニ動揺甚シケレドモ夜ハ陰暦ノ三月十五日ニテ空モ早ヤ晴渡リ月モ冴カニテ甲板上ノ綺麗イト心地ヨシ

仲冬ノ仲宿ノ母南ニ漂流サレテ三笠山ノ歌ヲヨミシハ此辺ナリト云ヒシニ遥キシ夜ノ月明ニ此歌ニ仕故郷ヲ思ヒ出テシテヲ再ヒ思ヒ出シツヽ哀レヲ催シタリ

夜十時ヒ寝ニ就ク

此夜暑気甚スカ如ク甚タ眠リ難カリシ

五月一日金曜日晴天海上穏ナル事稀ナリ唯暑気ニ苦ムノミ

昨日出帆ヨリ今日正午ニ至ル迄ニ百二十二里ヲ走リ寒暖計ハ八十四度ヲ示ス此日ヨリ食堂食卓ノ上ニ人ノ頃迄白キ綿布ノ暖簾ヲカケ一隅ヨリ支那人ノ紐ヲ引キ其暖簾ヲ動カメ風ヲ起シ食事中其数ヲ忘レシム

夜漸ク前日ノ如シ

別行

銀座 伊東屋製

No. 74 10×20

二日 土曜 快晴 海上平穏 昨日ノ如シ 左方
煙霞ノ中ニ陸地ヲ見ル 又帆船ノ浮フヲ見ル
見シ安南ノ地ヘシ 昨日ヨリ今日迄航
スル丁三百二十二里 昼ヨリ西貢迄二百七十三
里 寒暖計ハ八十六ヲ示ス 此日伺使及ヒ津
田氏ト碁戰メ日日ヲ消セリ

三日 日曜 晴 海上平穏 朝六時頃カンボヂ
ヤ河口ニ達ス 此河の其大サ墨水ニ比シキ位ナ
レモ水底甚タ深ク能クナタんノ如キ大船ヲ往
来セシム 両岸平原隙ナク椶櫚芭蕉蘇鉄椰
子ノ類繁茂シ稼々ノ禽獸ノ木々ニ飛ヒ鳴ルヲ
見テ立一考セリ 十時西貢ニ着ス 寒暖計ハ九
十四度ヲ示ス 河の水ハ汚濁シ臭氣アルカ如
シ 土民ハ顔色茶褐色ニシテ東京ニ多クハ赤或ハ
黄ノ布ヲ以テ頭ヲ包ム 婦ハ大ナル櫛ヲ
戴クモアリ 総テ裸体ナレハ全ク如キハ男
女ヲ別ツカサルカ如シ 男キハ土人ノ好ン
テ椰子ヲ喫スカメ二男女ノ別ナク其黒
キトテフ農家ノ構造ハ葉茅ヲ用ヒ田ノ田
舍ニ見ルモノ、如シ 全ク微塵ヲ生ス

銀座 伊東屋製
No. 74 10×20

上陸ヲ見合スヘク折シモ一天忽チ黑ク大雨車軸ヲ流スヘキ勢ヒニ付同船ノ人々皆ヒヘキ午後三時公使ヲ初メ六人上陸シ市街ヲ散歩スヘク娼樓アリ劇場アリヘク道路ハ新同ニテ所々繁樹鬱リ家造ハ東洋化ニテ精ヲ甚シク ホテルニハ 息ヲ鼓ス 夫ヨリ馬車ニ乘リ公園ニ趣クヘク馬車ハ比ニ非ヘク高貴ノ人ノ乘用トスルモノ之ヲ裸体競走ノモノモ之ヲ而シテ馬ハ佐渡ノ如クハ小サク身ヲ屈シテ從順ナルカ如シ公園ニ至ル芝木珍草並ニ田舍ニ見ルモノニ人ノサボテンノ甚高サ一丈餘モアルモノニハ驚ヲ喫シタリ其他禽獸ノ類一ト通リ揃ヒサルナシ又鱷魚ヲ見ル其形悪ハヘシ夫ヨリ家樂隊ノ練習所ヲ見ル別ニ変トスルニ足ラス直ニ船ニ帰ル間ヲ所ニヨレハ後前ハ波止場ヨリ市中ニ趣クニ付四ノ路ヲ取ラサルヲ得サレハ土人ノ小舟ヲ以テ往来セシニ近頃新道開ケ大ニ便益ヲ增ニ至リタルト此カ為メ土人ノ生活ニ苦ム者アル日

鱷

原文
及ニト

別行

り更ニ新道ヲ塞キ土人ノ小舟ニテ元ノ如ク往来スルヿトハナリレト今日ノ用明甚ハ或ベク人ノ労力ノ省イテ之ヲ新産業ニ費スヲ可トスルハ経済上ノ定論ナルニ新設ノ道ヲ塞イテ迂遠ノ小舟ヲ以テスル及ント思ニ近ケレ共是又止ムヲ得サル事ナリ而アリテ佛人ノカリ計ラヒレナラン埠ノ未タ進歩セサル事之ヲ以テモ知ルヘキ哉此夜蚊ニ苦ニテ眠ル能ハス

別行

四月曜日 晴 笑暑燥クカ如シ本船今朝五時出船ノ迎都合ニヨリ明日午前三時迄延刻レタリ

恵賜汁ハ九十度ヲ示ス午後経塔微雨細川宇野藤お三氏ハ古京商論ニ赴ク流なアリ十五分ニ達スヿシ三氏帰テ云フ商論ハ西貢ヲ去ル二里許山魏々タル堂宇ノ跡アリ昔ハ繁盛ナリシト見エ今日ト雖モ支那人住居ニ人口ノ如キハ西貢ヨリモ多キヲ覚フト

別行

五月曜日 晴 暑気前日ノ如シ船西ニカンボチ

全員次蛇ニ堪ヘス午睡ノ共ニ行カス船夜三時ニ至リ西貢ヲ発ス

銀座 伊東屋製
No. 74 10×20

別行

田ヲ下レル〈六時ニ及ビ暗洲ニ乗上ケ退自由ナラス〈為メニ一時間餘ヲ費ス〈十一時頃ロ燈明堂山下ニ至レ〈其頃ヨリ動揺ナレク暴クナリヌ〈暗勝汁ハ八十九度ヲ示ス〈昨日ヨリ涼シキヲ覚フ〈蓋シ船ノ進行ニテ凡ヲ〉起スノ故ナラシ〈昼ヨリ新嘉坡ニ向テ太洋ノ航スル〈夜ニ入リ海上穏カニナレリ

別行

六日〈水曜〈今日ハ昨日ニカワリ海上静カニ快晴ニテ進行速カニ西貢ヲ発メヨリ早ヤ三百八十五里ヲ走リ新嘉坡迄ハ僅カニ二百九十二里〈

別行

七日〈木曜〈快晴〈朝起セハ船ハ早ヤ新嘉坡ニ着ス〈埠頭ニ着クヤ否ヤ人員数ヲ小舟ニ乗ヒ十八〈暑暖甚ハ九十度ヲ示ス〈今日モ終日変ナラ〈田棋将碁ニテ日ヲ送レリ

此地暑レト風モ空気清鮮ナルカ為ニ英人キヌ〈船ノ埠頭ニ着クヤ否ヤ人員数ヲ小舟ニ乗ヒ移ス〈ヨウ〈パラゲース、オスチルドレン〉ト称フ〈蓋シ小児ノ身体発育ニヨルトテノ意ナルヘシ

粥ハ〈ントス〈又小童ノ薬研形ノ小舟ヲ漕キ来リ頻リニ船上ヨリ銭ヲ投セフヲ乞フ〈之ヲ投スレハ皆飛テ水中ニ入リ其銭ヲ拾フ〈又旅中ノ美味慰ミナリ〈此地ハ英領ニメ西来半島ト蘇門多臘嶋ノ海峡ニアレハ港内嶋

峠頗ル多シ天然ノ風景アリ且ツ欧洲ヨリ東洋ニ航スル者ハ必ス立ツスクレハ実ニ支洋ノ国門ニシテ英モノ支洋商権ヲ握ルモ此地ヲ占ムルヨリ起ル利益ナシトセス埠頭ヨリ市中ニ到ル凡ソ二英里ニ馬車ニ乗リ行クニ馬車ハ世貢ノモノニ比シテ美ナル贅セス市街ハ土民支那人ト相半ハシ欧人ノ市街ハ別ニアリ人力車アリ日本ニ近キ世貢ニ見ル又反テ此処ニ見ル英理由ノアル所ヲ知ラス余ハ使等トホテルヘ帰リ食事ヲナル頃

7ツ時ニ同船ハ至テ粗造ナレト此地ニテハ之ヲ以テ最トスト云フ夫ヨリ再ヒ馬車ニ乗ツテ先ツ植物園ニ行キ特ニ奇ナルモノヲ見ス又他ニ赴カスシテ帰ル此地常見ルヘキ所アリ1番モ午後ハ出帆ナレハ他ヲ見ルノ暇ナク四時乗船ス十人ハ即チ馬来人種ニシテ西貢ノ土民ヨリ一層更紗木綿ヲ以テ腰下ヲ纏ヒ額ニ一直線ヲ縦ニ黥シ頭ハ新髪束髪相混ス女ハ紙花ノ如キ同ク更紗ヲ以テ身ヲ纏ヒ鼻端ニ環ヲ下ケ又男女共ニ跣足ニシテ

ルニ息ツウチ土人土産ヲ携ヘ来テ強賣ス〈宝
玉ヲ箱入セシ指環更紗大綿籐杖小猿文房ノ
類ナリ〈又各種ノ貨幣ヲ携ヘ来テ数ノ〻交換
ヲ促ス〈寅ニ厭ツヘシ〈諸物不廉ニ又借物多
シ〈皆テ土人ノ風俗人情ヲ見ルヘシ〈此日日
リ東京頗ル多ク甲板上雑踏甚シ〈五時出帆ス
〈左ニハ蘇門答臘島ヲ遠見ス〈又右ニハ群鳥
離列シタ陽ニ映シ絶景云ヒシカナシ〈此夜暑
気頗ル甚シ

別行

八月　金曜日　快晴　右ニ馬来半嶋ヲ見ル〈此日ハ世
北ニ向テ航スレハ船ハ風ヲオヒ暑気特ニ甚シ
ノ寒暖計九十三度ヲ示ス〈且ツ甲板上乗客多
ク之ニ雑ノ餘地モ非サレハ徘徊ニモ甚タ苦ム〈
昨日出帆ヨリ二百五十七里ヲ航セリ〈此夜船
客中ピヤノヲ弾シ唱歌スルモアリ大ニ旅愁ヲ
慰ス

別行

九日　土曜　快晴　海上静穏ニシテ大洋洲渚嶋ヲ見
ル〈切日正午迄航スル二百十三里ニ入寒暖
計ハ八十八度ヲ示ス〈此夜音楽舞踏モアリ

別行

十日　日曜　快晴　昨日ノ如シ〈寒暖計ハ九十度ヲ

原文
長サ三間ニ過キ甚幅

25

示ス　此日航スル一三百二十四里

十一日　月曜日　晴　今日ハ大ニ凌キヲ覚フ　裏日後

汁八十七度ヲ示ス　此日航スル一三百七十七里

之ヨリコロニボ迄三百四十七里

十二日　火曜日　晴　今日ハ朝日ヨリ銀蘭嶋ノ諸山ヲ右方

ニミル　此日海上ハ波ヨリ強ク船客大ニ難ム

午後三時コロンボ港ニ着ス　之ニ着スル中否

土人小艇ヲ漕キ来リ上陸ヲ促ス　其小艇ハ

日知北海道アイノ人ノ用フルモノニ同ジク長

サ三間ニ過キ甚幅僅カニ一尺広而已ヲ入ル

ニ

見ルノミ　而又甚顛覆ヲ防ク為メニ一方ニ木

材ヲ結ヒ付テ以テ其釣合ヲ取ル　尾レトモフ

ヘシ　又土人ノ土産ヲ携ヘ来リテ船客ニ強要ス

ル恰モ新潟嘉坂ニ於ル如シ　又土人ノ諸所案

内ヲナサント駱ル者アリ　皆前ニ旅セシ人ノ

保証状ヲ所持スル以テ船客ニ示シ已レノ不正ナ

ラサルヲ話ス　中ニ井上姫ニ印氏ノ保証状ヲ

所持スル者アリ　金等ニ誘導ヲ命ス　四

時上陸メグランド、オリエンタル、ホテルニ登ル

少ク之ニ息ヒ馬車ニ乗リ市中ヲ歴覧ス　市中

ハ英人ノ外ハ皆土人ニメ此地既ニ一ノ支那人ヲ見スク甚家ハ何ク葺ニ瓦ヲ以テスク土人ノ容貌ハ新嘉坡ニ同ク唯骨格ノ雄偉ナルヲ覚フク行ク〻数四右ハ海岸ニ濱シ左ニ泉水アリ其辺リハ青草慢々トシテ牛馬ノ其中ニ戯ルヲ見ルク博物院ヲ見ルク建築ハ宏壮ナルモ陳列品甚タカナクシテ同ヲ煩ハスニ足ラスク唯土産宝玉ノ部ハ見ルヘシク端ニ鉄道列車ノ走ルヲ見ルク蓋シ内地ニ行ク線路ナリト云フク日已ニ黄昏ニ至ルク乃チホテルニ帰レク途中談笑若駘ニ土地ノ豊饒人民ノ堪忍ヲ誇ルク又曰クク此地絃妓アリク能ク歌ヒ能ク舞フク其尤物ニ至テハ衣服装飾遠ク欧洲貴婦ノ上ニ超越シ容色モ土人ナレ仁黒カラス而シテ美ナルモノアリト欧ニ之ヲ賞カムルカ如シク其言実ニ信スルニ足ラスクホテルニ於テ晩食ニク公使ハ明日アラビ、パシヤヲ訪ハントフク右ニホテルニ向フク

食事

飯ヲ共ニ行ントク欣セシカ細川津田藤村ノ三氏及ヒ同船ノ英人西三名ノ帰船スルヲ聞キ公使ト宇野氏ニ分シテ帰ルク アラビ、パシヤハ埃

又ニ於テ英汽船ニ板ニテ遂ニ擦トナリコロニ
ボヲ去ル一英国評ノ処ニ碇泊サルヽモノナリ
此夜甲板上頗ル清涼ナリシ 夫レ錫蘭ハ英
領ノ尤モ古キモノナル印度ノ一洲島ニメ大サ
我九州ニ比トシ 英佛ノ船近年迄ハ同嶋ポイ
ントデゴールと碇泊セルカ其地海面ニ突出メ
波ノ激動ヲ受ケレハ近頃此地ニ改メタリト云
フ 此地モ同ク海面ニ突出スレハ近年海中ニ
三百間ノ長堤ヲ築キセカ為碇泊中船ノ動揺ス
ルヿナク安全ノ港ニナリシト云フ 且ツコロ
ニボハ同島ノ都府ナレハ総テ南業上ニモ大ニ
便益ヲ与フト云フ 此ロ土地ノ風景土民ノ風
俗等ノ写真ヲ購ヒ得タリ 此地ノ馬ハ肥大ニ
ノ柴棍新嘉坡辺ノ馬ノ如クナラス 全馬ヲ相
スルヿヲ知ラサレ共最モ良偵ナラント考フ
蓋シカ地カルカタハ馬ヲ以テ名アリト云フ

別行

十三日 水曜 快晴 午前十一時船ニス
アラビー、パシヤー人ロカキクニパレヤハ深
沈ニシテ寡言容貌ハ雄偉ニシテ厳粛タル一豪傑
ト云フ 全太ニ行テ彼ヲ見サリシヲ悔フ 又

二年ハナ人ニ誘ハレテ彼絃妓ヲ見ントメ妓楼ニ登リシカ全ク前ニ聞キシモノハ如クナラス漆黒不潔ノ婦人ノ唯タ濃ク粉黛クモノナリ故ニ二年モ直ニ帰リシト云フ昼又一笑話トナスヘシ蓋シ本地ボムベシ、カルカタ杯ニハ未タ郵アリト云フ

別行

十四日 木曜 晴 逆風 高波 ○船客云フ 倭船カレ動揺スル 然レモ大ニ苦痛ヲ覚フ 蓋シ仰臥洋ニ有名ナル貧易風ナリ

8

別行

十五日 金曜 晴 今朝ヨリ逆風変ジ順風トナリ進行速カニナリヌ 温度九十度ニメ昨日ヨリ三百里ヲ航セリ

6

別行

十六日 土曜 快晴 此日三百七十里ヲ航ス 寒暖計 島風ハ英始メニ吾ヲ暴起スルモノナリ 然ルニ昨日風ノ起リヤ劇シカラス 此ノ如キハ帆檣折レ船破壊スルノ甚キニハ至ラサルヘシ 又テ恐ルヘキ風ノ為ニ清涼ヲ覚フハ此航海ノ僥倖トシテ 此日寒暖計八十八度ヲ示ス

6

昨日ノ出帆ヨリ二百九十里ヲ航ス

銀座 伊東屋製

八十八文ヲ示ス

十七日 月曜 晴 炎熱 寒暖計九十三度 船航スル丁三百廿一里 此日動揺甚シ

十八日 火曜 晴 午前十一時左ニソコトラ嶋ヲ過ク

ソコトラハ亜那利加ノ東北端ニ当テ昼夜ハ亜米利加ノ東海岸ニ入ラントスルノ所ニアリ 戸口サハ砂漠ノ地ナレハ雨降ル丁六七歳ニ一回ノ樹木ヲ見ス 寒暖計九十四度ヲ示ス 船航スル丁三百二十一里

十九日 水曜 晴 暑気養ス甚シ 寒暖計九十六度 船航スル丁三百二十一里 昼ヨリ亜米利加ノ東海岸ニ入ル 此日船中慈善会ノ念アリ 船客ヨリ少ス一品ヲ出サシム 蓋シ水夫ノ几帳面ノ為メニ倒レシ者多キニアレハ之ヲ以テ死者ノ弔ス

ルノ意ニメ一ニハ船中ノ無聊ヲ慰シ一ニハ水夫ヲ慰マシムルノ手段ナリ 日本服紗地ヲ出ス

二十日 水曜 晴 午前七時船亜米利加ニ着ス 此日炎熱 昨日ノ如ク寒暖計モ昨日ニ均シ 此地総テ不

原文

モ〳〵沿岸家屋アリ周圍ヨリ山巔ニ至ル処樹木ヲ見ス〳〵山背亜剌比亜人ノ庄アリトテ〳〵又飲水ニ乏シケレハ市外ニ英国許ニ一大濠ヲ掘リ水ヲ貯ヘ駱駝ノ背ヲ以テ之ヲ運搬シ市人漸ク温ヲ変クヲ得ルトテ〳〵一盃ノ水ヲ得ルモ容易ナラス〳〵此ノ如キ地ニ生活スル人民ハ不幸ト云フヘキ〳〵其水溜ノ構造ハ実ニ巧ミニ〳〵ノ弾更ニ之ヲ見レト欲ス此地ニ来ルモノアリト云フ〳〵余北軍煩雑ニ困シ一人モ上陸スル者ナシ〳〵土人土産ヲ携ヘテ賣ンヿヲセフ〳〵前ノ所々ニ異ナラス〳〵又小童ノ投銭ヲセフヿヲ錫蘭新嘉坡ニ同シ〳〵此地ノ如キ瘠土ニ港ヲ開ク何ノ利益アルヲ知ラス〳〵只紅海ノ鎖鑰ニ当レハ英吉ノ巨万ノ金ヲ費メラヲ守ルヘシ〳〵土人ハ即チ亜剌比亜人種ニシテ骨格容貌ハ欧人ノ如シト雖トモ性質ハ厭フヘキ黒キノニ〳〵此地前述ノ如キ瘠土ナレハ土人ハ一盃ノ水一粒ノ粟ニモ奪ヒ合セサレヲ得サレハ自ラ耐忍ノ風アリト云フ〳〵手後ニ出帆ス〳〵此ヨリ左ニハ亜非利加洲右ニハ亜剌比亜ノ西洋海ノ間ニ鬼門関ト

称ス人ノ恰ルト西紅海ヲ過ルナレハ甚煩熱思
ヒ知ルヘシナリ

別行

二十一日 日曜日 晴 寒暖計ハ昨日ニ異ナラスト雖モ
漢ヨリ吹来ル熱風ニ反テ苦キヲ覚フ 甚暑気
恰モ烹ルカ如シ 昨日出帆ヨリ船去ル二百
六十里

別行

廿二日 月曜日 晴 今日ハ暑気少シク覚ヘルカ如シ
蓋シ昨日ヨリ已ニ西北ニ進ミシ故ナランカ 此日船進ム二百
廿三日 火曜日 晴 暑気大ニ減ス 此日船進ム二百
十九里 此ヨリ蘇西迄四百十里 此夜慈善会抽
籤ノ当日 抑モ此会ハ船客中ニ発起者ヲリ
テ其幹支ノ任ニ当リ最始総船客ニ入会ノ有無
ヲ問ヒ之ヲ諾セシ者ニハ振符ヲ出シ記名ヲ乞
ヒ名所持ノ一ヲ出サシム 次ニ株札ヲ品数
ノ三倍割ル 合ハ八十二品三千六枚 総船客ニ之ヲ買シムル
望ム 之ヲ買フノ多キモノハ六七枚ヲ取リシ
モノアリ 但シ一株ヲ引ク毎ニ一銭ヲ徴ス 故当日ハ甲板上各石ノ旗
章ヲ張結シ後面ニ飾菓ヲ据ヱ中央ニ物品ヲ
陳列シ日和提灯ヲ一面ニ点シ伝載甚タ佳
午後八時総船客ヲ招コートヲ着シ但シ童ナ

出場ス　此時音楽ヲ奏シ婦人四名交ル〻〻出テ、唱歌ス　右終テ幹夏ニ名壇ニ登リ少女ニ名亦之ニ登ル　他ノ幹夏ハ下ニ在テ帳場ヲ検ス　坐位テ一ノ少女函中ノ札ヲ取テ上ノ幹夏ニ与フ　幹夏其番数ヲ呼ヒ下ノ幹夏之ヲ識者ノ受テ其物品ヲ指ス　之ヲ受ル者出テ、之ヲ取ル　之ヲ其順序トス　然レトモ空札ハ物品ノ三倍モアルハ其無

姓名ヲ呼フ

闇ニ当ラサルモノ過半　金ハ婦人

ノ襟掛ヲ得タリ　之ヲ終テ踊舞アリ　之食アリテ夜半過キニ至リ散ス　又船中ノ好キ慰ヲナリシ　蓋シ其株金ヲ以テ水夫ニ与フルモノ

別行

廿四日曜日晴　今日ハ大ニ涼シクナリヌ　已ニ熱地ヲ過キテカラ京ヲ覚フレハ恰モ秋涼ノ如キ心地ヲリ　寒暖計八十二度ヲ示ス　西岸亜剌比亜、亜非利加地方ヲ見ル　船少ク動揺ス

別行

夜十一時ニ及ヒ蘇西ニ達ス

廿五日月曜日晴　本日出帆ノ処検疫ノ為メ明朝迄遅レタリ　此地埃及地方ニ在リ人

ハ伏ス星ヲリ上陸スル西班牙書記官ニシ
バーチト云フハ日ハ在勤ナリシカ土耳其ニ勤
仕セリトテ同船シ来リ此ヲ以テ上陸セリ此地
弾ニ見ルヘキモノナリ且ツ埃及土耳其地
方古代ノ遺跡探究ノ志アレハ諸伊ト共ニ上陸
セス

七日 寒暖計七十八度ヲ示ス

六日 朝七時出帆ノ蘇西運河ニ入ル此地
蘇西地峡ト称ス地中海ト紅海ヲ僅ニ数〇十里ノ
陸路ヲ以テ隔リシカ為昔時東西洋ノ航海ヲナ
マ者ハ亜非利加ノ南端ナル喜望峯ヲ廻リテ大
カ為メ二月余ヲ費ヤシタルカ鉄道開ケテ以来
ハ蘇西ヨリ上陸ノ鉄路ヲ以テアレキサンドリヤ
ニ達シ再ヒ乗船ノ欧州ニ達スルヿトナリ格ヤ
便利ヲ覚ヘシカ佛人此地峡ヲ開鑿スルノ企図
ヲ起シ上地湖沼多ケレハ一湖ヨリ他湖ニ通シ
斯ノ如クシテ遂ニ内海ヲ連絡スルニ至レリ
其後切ハ僅カニ十数年前ノ事ナリシカ是カ為
メ航海者ハ危険ナル大海ヲ二ケ月ヲ費シ航ス
ルノ艱苦ヲ免レタリ

実ニ近来ノ一大変業ト
云フヘシ

欧人ノ支ヲ起ス遠且ツ大ト云フヘシ

原文出来り

キ

運河ハ狹キニ至テハ二十間許ナタルノ如キ大船ハ行違フ能ハス所々待合スヘキ所ヲ設ケタリ又其廣サ兩岸總テ漢ニメ埣中白ノ外眼ヲ遮ルモノナシ時々土人ノ駱駝ヲ追フテ行クヲ見ルノミ午後六時船運河ノ中ニ投錨ス蓋シ運河ノ幅狹ク夜間ノ往來危險ナレハ也此時遠ク數箇ノ孤嶋ヲ空間ニ見ルノミ皆云フ湖中ノ嶋ナリト一人アリ云フ此ノ如キ大湖アルナシ星即チ富貴樣ト余ハ之ヲ見ルノミ而メ此

別行

沙漠中ニ立ヲ見ルモ又奇ト云ヘシ八時ニ至リ猝カニ船ノ進行ヲ始ム其故ヲ問ヘハ運河ニ障リナケレハ進行ノ特許ヲ得シト定半ポルトサイドニ着ス夜間ナレハ上陸セス

七日 水曜日 晴 拂曉出帆ス 又一傍ノ速急ヲ加フ 寒暖計七十五度 此ヨリ地中海ヲ航スルニ

地中海ハ亜細亜、亜非利加、欧羅巴ノ三洲ニ包マレ内海ナレハ元ヨリ廣大ナレハ太洋ヲ航スル如ク望中一点ノモノナシ 出帆ヨリ百〇六

八日 晴 北緯四十七度ヲ航ス

丙

95

里ニ航ス

廿八日 晴 今日ハ右ニ陸地ヲ見ル 此日進行
三百廿四里

廿九日 晴 此日航スル二百廿四里 昼ヨリ
ヨーロッパ島三百五十八里 暗ニ及ヒテ崖ヲ
彼ノ有名ナル、リー島ノ上ナル山ヲ見ル
夜半ニ至リ以太利大陸ト同島トノ間ナル海峡ニ温ク

三十日 晴 午前ヨリ以太利地方ヲ右ニ見ル
午後一時ビエスビユス火山ヲ見ル 其山巒ヲ

過テ海岸数里ノ市街ヲ見ル 即チ「ポンペイ」ス
里ニ
三ヲ遠見スレハ煙化石造ノ家屋相列フテ
数ヘ美觀ニ 而シテ此地位置山麓ヨリ海面ニ連
レハ其大小ハ異シ 此、我神戸ニ似タルカ如ク
午後三時投錨ス 着船スル中百名ノ海中ニ
游泳ノ投錢ヲ乞フ者前ニ見ル所ノモノ、如シ
然レ此地ノモノハ大人ニシテ且ツ白哲人種
ナレハ一層其愚ノ駭ハンヿヲ見ル 又小舟ニ
琵琶ヲ携ヘ来リ舟中ニテ彈シ或ハ踊ルモノア
リ 其婦ト覓レキ者洋銀ヲ投テ船中ヨリ投錢

丙

銀座 伊東屋製
No. 74 10×20

スルヲ受ク一矢スヽシ此日午後六時出帆
トノフナレハ所々ヲ見ルノ暇ナレ宇田氏
及ヒニヨノ英人ト僅ニ市街ヲ見ル此ヒ政
州中ノ古モナレハ古代ノ城壁半ハ頽破スルモ
ノヨリ存シ市中ヲ城壁ノ跡ヲ回リテ街衢ヲ通
セルト思フ所多シ市街ハ外觀ニ異ナリ汚穢
ノモノ街上ニ堆キモ除カス乞丐ノ徒多ク甚
タ厭フヘシ午後六時帰船ス同時ニ出帆
ス

別行

廿一日 月曜日 晴 午前十一時ノ比右ニ見ル島左ニ
コルシカ島ヲ見ル コルシカハ彼一世ノ生誕ノ地ナレハ
カ生誕ノ地ナレハ甲板ニ出テ望見シ当時ヲ想像
シタリ海ノ底慨ナキ能ハサル
ルシカト共ニ当ルサルジニヤ島ノ間ヲ過ル
ナレト今回ハコレシカノ北ヲ過キ又如何
ナル都合ナルヤヲ知ラス石炭庫ニ百四十四
屯ヲ航ス是ヨリ馬耳塞迄二百四十四里

別行

六月 一日 月曜日 晴 午前四時船佛ヒ馬耳塞ニ安着ス
今回ハ都合ヨク此ノ如キ平穏ナル航海ハ甚
タ稀ナリト云フ七時上陸荷物ハ税関ノ検査ヲ

銀座一伊東屋製
No. 74 10×20

終リ直ニ馬車ニ乗シ海岸ニ至ル此地人散歩ノ
着スル朝餐終テ再ビ馬車ニ乗シ海岸ニ至ル此地人散歩
ノ人ニ多イ海岸ハ風強ク砂塵起リ散歩スル自由ナラス茶亭ニ小息シテ帰ル此風ハ亜米利加ヨリ吹来ルモノニシテ「ミストラル」ト云フホテルニ帰テ午睡ス晩餐終テ市街ヲ散歩ス西側ハ層或ハ六七層ノ家ナルハ言ヲ俟タス東西路繩ノ状況盛ナリト云フヘシ歓楽場ニ至ル時僅ニ曲芸舞踊ヲ敷ルニ供スルナルカ広大ニメ美麗ナリ我モニ比ナル此場ノ如キハ吉地ニテ此麗ナリト云フ

而シテ歳市ヲ以テ美歓トスル蛙見ト云フヘキ技芸ノ如キモ最上ノモノニ非スト云フ

然レトモ衣裳其他総テ美ト云フヘシ余等

動ヲ見テ帰ル此踊舞ヤ演劇カト思ヘハ意旨ナク全ク音楽ニ調メ踊舞スルカト思ヘハ少モ

ク道理アルカ如ク我モ未タ此ノ如キノ技ヲ見サレ

ヒロ布朧ハ代ノ古色ヲ根據トメ作リ設ニ踊舞ニ帰セシムルモノナリ我モニ照葉狂言ト云フモノ又ニ近カラニカ

銀座 伊東屋製
No. 77 10×20

婦人ニシテ軽舞ノ状空ヲ馳スルカト思ハル〈歓
客共舞ノ好処ニ至レハ皆拍手メ之ヲ賞ス〈十
時ナテルニ帰リ寝ニ就ク

別行

二日 火曜日 晴 午前十時細川津田藤村ノ三氏ハ此地
ヲ出発ス〈蓋シ今等ハ今宵遠カニテ巴里ニ
直行シ代等ハ明昼夜ニ立寄リ(迂)細ノ今等ハ巴
里ニ相会セントノ約ナリ〈書食後宇野氏ト
同ヲ久ル〈共前面ニ人馬ノ彫刻アリ〈最モ精
ちヲ極メ共下ヨリ清水流出シ池面ニ震キ楼門
ノ左右廻廊アリテ棲囲ニ達ス〈右ハ動物模刻
ノ陳列場ニシテ大ハ美術ノ陳列場ニ〈外面ノ装
飾最モ美ヲ極ム〈後園ニハ象虎獅子豹ヨリ亜
細亜亜非利加ノ家獣ニ至ル此実ニ其数ヲ知ラ
ス〈此日已ニ出発ノ時限ニ迫レリ動物類及ヒ
模型品ノミヲ見テ帰館ス〈六時四十五分発急
行ノ汽車ヲ以テ巴里ニ向フ〈此夜途中ニ微雨
ス

三日 水曜日 晴 午前十時巴里ニ達ス直ニ馬車ニ命シ
カフェンヌ街十九グラヌドホテルニ着ス〈同

別行

街ハ巴里中最モ繁盛ノ処ニメ肩摩轂擊又マル
セールノ比ニ非ス グランドホテルハ同地最
モノホテルニメ 其廣大ナル驚ニ堪タリ 総テ
五層楼ニメ前面ニ噴水アリ 夜ニ入レハ噴水
ノ下ニ大小ノ灯ヲ点ス恰モ大中ノ水ヲ噴出スルカ
如ク殆ン美ナル書餐後アブエエロ マルソー
ナル人有ル使館ニ至リ公使蜂須賀茂韶書記官
宇川盛三郎書記生杉方某ニ面ス

四日 本日晴 使宇野氏ト換金受取ノ為メ銀行ニ
赴ク 日本人林忠正トモ者公使ヲ訪フ 金

之ニ面ス 公使ノ不在ヲ因キ明日再ヒ来ラレ
トテ帰リ去ル 午後宇野氏ト書肆ニ赴キ二三
ノ書ヲ購求得タリ 又公使等ト共ニ中ノ劇ヲ観ル
プランシトヲ見ル 奇獣珍禽数ン多シ 出レニ
馬車ニ乗レモノト思ヒ同シケレハ贅セス
此日蜂須賀氏ヨリ晩餐ノ饗アリ 午後七時公
使宇野氏等ト共ニ馬車ニ乗リ 蓋モ日本食ナリシ
帰路曲馬場ニ行ク 馬上ノ技実ニ絶妙トモ申
ヘシ 又一婦人ノ曲芸ノ類アリ ヲ演スルモノア
リ危険見ルニタヘス 滑稽者アリテ戯談百出

銀座 伊東屋製
No. 74 10×20

ス笑フヘシ 其後ニ八人ノ女古代ノ装
ニテ出テ来リ音楽ニ調メ馬上舞踊ヲナス 頗
ル美麗之ヲ出テ市街ヲ散歩シ茶亭憩
フ 客ノ声アリ 渚君ハ御国ノ人ナリトテ
ムシハ二名ノ日本人 其姓名ヲ問ヘハ
吉田某横田某ト答フ 伝使等モ名ヲ問ヒ談話
少ナカラス 分袂ス 横田ト我友佐藤友太郎ノ厚
知ナリシ故ナリ

別行

五月 晴 午前細川氏等着ス 書簡後氏等ト伝
使館ニ赴ク 今西園寺氏ニ云フ 足下地ノ
滞在ハカナリモ一周間ト云 舎弟佛語オモ
解セス 佛独ノ語ヲ解セス一人此旅行ヲナス甚タ不便
況ンヤ足下 頗州ノ地ニ慣熟セサルオヤ
然ルニ此任ヲ起ストハ実ニ大胆ノ極ト云ヘシ
然シモ自ラ奮テ倉サハ弟ニ困難ナルヲモア
ラン 行クヘシ 畢又一ノ経験ト 舎モ思
ニ於テ心ヲ決ス 細川氏ト共ニ伝使館ニ赴キ

シ蜂須賀伝使ニ暇ヲ告ナリ〈伝使ト書記生橋口某ニ面会シ帰途凱旋記念ノ為建築セル門ニ来ル甲メーニアリトシテ其下前後左右ニ通行自在ニ中ニテ登ルヲ得ナリ〉

〈市中ヲ距ルヿ二里ヲ見ル〉〈是ヨリ西方ニ東ムボアドブロンニ到ル〉

池面ニ臨ミ池中ニ島アリ〈風景絶佳〉舟アリテ游ブ樟白花ナラシム〈鳴中ノ美景ハ「スウ」ヲ入コトヲ〉

〈ソレ〉ラージルトテ瑞西西部ノ家造ナレハ風流ニ〈之ヲ過キテ競馬場アリ〉〈周囲ニ英国人〉

〈ヘレ〉〈之ヲ見終テ帰路ニ〈晩餐後相会メ〉

〈市中一人アリ〉〈来訪ス〉〈蓋シ井物産会社〉

〈張員場ヲ某〉〈会人ノ誘導ニテ散歩シ「プラ〉

スドコンコルド」ニ到ル〈周所ハ市街ニモ非ス〉

〈「公園」ニモ非ス〉〈数百年ノ古樹蓊鬱アリテ周囲〉

〈モ書ノ如シ〉〈蹴衛ノ樹下椅子アリテ小息ニ便〉

〈ニテ〉〈又別ニ〉〈会場アリテ随意ニ出入休息シ〉

音楽ノ奏ニ唱歌ニ〈モノアリ美人ノ揃ヘテ戯〉

ルヽモノアリ〈一ケ所ノ会場ニテ燈火ノ数幾〉

百ナルヲ知ラス〈市内ニテ某会社ノ用業式〉

〈市ニテ新紙ニモ〉〈某会ノ当日ノ景況盛ナリシ〉

銀座 伊東屋製
No. 74 10×20

トミテフモノハ、如キモ巴里ニ於テ夜遊興ニ一ケ月
所ノ会場ニモ及ハス、嘆マヘキ哉、ニニノ自然
メクレオパトラノ五塔ヲ見ル墓ハ及ヨリ商
ラセンモノニテハイオログリフ中ニフクロトミフ
古代文字ノ彫リ付アルモノ、如ク牡シ夜
間ナレハ判然タラス、又白イロリー宮ノ前ニ
至ル、昼ハ三吉拿破崙ノ王宮ト云フ同宮
ハセーヌ川ニ瀕シ頗ル壮大ニシテセーヌ川ハ巴
里市中ヲ横断メ流レ其幅西京鴨川ニ伯仲ス
帰館十一時ニ及フ、七日一吉拿破崙ノ墓所

ニ詣テサリシハ頗ル憐憫ナリシ

六日 晴 余平前九時ニ十五分ヲ以テ維也納ニ
向ヒ細川津田藤村三氏ハ倫敦ニ向フ、故ニ長
途ノ航路互ニ無恙此ニ幸セントヲ祝シ又無変ノ
再会ヲ期メ分袂ス、余ガイド一人ヲ伴ハ就フガ
イドハ案内者ノ意ニ停ル場所ハ五分ニ
ノ余ノ傲ヒシモノハジユウトラートテ美
実ナル者ニテ能ク英語ヲモ解シ信切ニ去ル
タリ、停車場ニテ余レタリ、午後六時ニ
覚セキ吹伊独ノ境界ト見ル停ル場ニテ物ヲ

別 6

七日 日曜 晴 進行

進カナルヿ昨日ノ如シ 午後二時ノ頃 独澳ノ境界ニテ荷物ヲ驗シ

驗 夜ニ入リテ進行甚タ遅ク 夜十時ニ及ヒ 維也納ニ達シ直ニ馬車ヲ就フテリングストラッセナル「ホテル」イムピーリヤルニ着シ直ニ寝ニ就ク

今其地名ヲ忘レシ

進行甚タ遅カリシ 此夜車中ニ眠ル

別 7

八日 月曜 快晴 午前九時ロートリンゲルストラッセナル日本公使館ニ至リ代理公使到着ノ旨書記生大久保学而ノ諸氏ニ面シ書記官條一郎書記生大久保学而ノ諸氏ニ面シ安着ヲ報シ併セテ在京諸氏ノ伝言ヲ述フ 且ツ安着報知ノ電報ヲ発シ又後来就学等ノ方法ヲ談合

別 8

第 東京ヲ出テ、ヨリカナ一日ヲ以テ維也納府ニ達ス 是ヨリ勉学ニ従事シ又五年滞留中ノ行記ヲ筆スレトモ暇アラサレハ本日ヲ以テ限リトシ是ニ於テ筆ヲ擱ク

□□明治十八年六月八日於墺国維也納寄舎

殿山学人識

別 5

航海里程

横浜ヨリ香港迄 千五百九十里

香港ヨリ西貢迄 八百十五里

西貢ヨリ新嘉坡迄 六百三十一里

新嘉坡ヨリコロンボ迄 千百七十里

銀座 伊東屋製

No. 74 10×20

コロンボヨリ亜典迄　二千〇九十五里
亜典ヨリ蘇西迄　千三百十里
蘇西ヨリポルサイド迄　八十七里
ポルサイドヨリポルスル迄　千百里
ポルスヨリ亜耳塞迄　四百四十八里
亜耳塞ヨリ総里程　九千七百五十二里

小る発スルノ前友人紅巴ノ送詞ヲ贈ラル、モノ多中ニハ感ニメ慚愧ニ堪ヘサルモノアリ又小るノ曾テモ捨テス望ヲ後来ニ嘱セラル、モノアリ

小子不敏ト雖モ勉勵ラス以テ諸子交誼ノ厚キニ報ヒントス今記行ノ後ニ之ヲ載セテ以テ一ハ諸子ノ厚意ヲ忘レサラシムカ為ニシ一ハ以テ已レノ勉勵スルヿ為ニス小る常ニ人ノ事実ヲ以テ交ヲ換ヘス故ニ今之ヲ載スルニ当テモ投寄ノ順序ヲ以テ敢テ人ノ為メニ之ヲ前後セシメサル也

奉送　伍樹仙臥　奥太利亭　中

別頁

一部

原文
裝勵

小子

三字

近衛公奉勅命留学于澳太利発軫將在近因帰
平京師設祖遮於休憩楼余拝謁送之公曰吾今日
自京都經莞道游富士嶽枳而来於此余為其煩也
少爲伸些田小泉諸子至諸子及余嘗敬授句読習
字尊術故公之来於此地也必招此四人賜款待余
服其信也既而俳諧曲作抔盤狼藉或拍肩引袖或
抗論喧嘩仆欣仆笑余感其寛也余不相見四年
於茲矚其非前日之公矣嗚呼公之德信敏寛備焉
信云寛則得衆信則人任敏則有功夫上之道不過
此三者而今又赴于陜都宇維納研究以理異日業
就帰朝則非復今日之公也其才其德將驚人也
耳嗚呼聖明使公面学於海外其意深矣哉

奉送霞山近衛公奉勅赴澳洲序

公之在西京也入銅駝之巷曠受普通教育文始視公
之在輿也敬公勤学不見有倦怠之色也文以是知
公之好学公弗彩秀徹識量清寛瞻視儼然有大異
於衆者然而公不以貴顯自驕喜接学童不敢慢之
故学童亦敬懷公終不能離也文以是知公之洞通

於民情矣明治十年夏公拝侍從鹿児島帰京後奉
勅大臣再公益黽勉不懈益德日進而文章稍有望
於公焉惟
今上天皇以聖神之天資具文武之盛德不惜重賞
高爵汎招天下之智識以代天工而在天下也夙夜
思政支之臣不能措焉知公卓識好學賢有政治
之才且憶公之先世有功勞於国家也乃勅公赴
澳州以脩政治之学蓋帝意將待公之学成德立
之日授公以天下之機務也必矣詩曰亡念爾祖聿
脩其德者即公之謂乎文国海外之者地凡急縣弾
於各邦業公行至之日為国強飯自重勤学勤精業
成德立乃速帰国夜將順聖旨以上以報
帝之特恩中以聿脩其祖德下以平治百姓也公幸
逢旃文於離合之際甚然於懷乎亦將刮目以
待公之帰也謹叙一言以奉送其行于時明治十有
七年十月二十六日

奉送伊藤公之西洋

大西豊口口

幾度経過心壁紅机白雲吐佳節日東今日多男子
破西洋萬里天

日日霞山伊藤公の澳国へ出で発するに臨て政務の多忙

原文
脩免よと宣託

脩免よと宣託おっとえ畏こきに相せをを
一定
家らせむの〜よりて程なく船出し給
はんと法り給へるときよ美て東方
三国一殿

不知知と遠き海山を元行者の首に男は極
免む

末栄はせん其振舞秋やのて安み行はせん故今
より天まは

一行空白

君命非至鉄艦至鳴程九萬破浪行我伝他日帰朝
六條隆吉

後果見神州沖一名

一行空白

序遠近衛霞山伝赴澳地利序
柴田秀有

仁者必有勇矣勇者不必有仁矣信哉仁徳至知至
而命不壽則不能偏施徳於国家也知徳既至矣命
亦壽矣而元王弱不健者則勇徳慧術和之人亦無奈
之何也今茲甚月近衛霞山伝奉勅物赴澳地利
維也納其盛徳の知也都王伝士大夫留学各国者
不為勘也然未国有留学于澳地利者矣其有之以
我霞山伝為嚆矢明治五年始入学于銅駝校学ロ

48

一行空白

学費進望明治十年吉校入舎為大学学術益進知事
亦將墨于澳地利豈誠可不盛德大業哉有仁而
勇者固不可為也壽而不健者豈如夭哉能壯体
格強健而其德落才疎者無奈之何也然則方
今之世微霞山以誰敢当此重任乎豈以吾之悲別
者豈為喜而其喜不可謂也詩云見有德行四国正
之是霞山以其人之謂乎伏誠不絶回四之青雲吾
吾輩鄙人(鄙)座下亮不異回四(秀)有感佩之(餘)不勝
大不敢敢贅鄙言以表欽慕之至情云

一行空白

花送近衛霞山行尊　勅留学于澳地

別

泉武則□□

雲間遥見大鵬飛(萬)里海天縹瑞暉八十四州皆仰
慕五秋霜霞屋吟衣

一行空白

□□□(広)吾乃君の面目とて(こと国)行
開
冠(冬)る宵秋雪よりも行君の別を更み惜む
別
□ふ馬姿をなむりる近衛高(鳳)凰□
一の卿(生)

中村元三□□

一行空白

竊カニ聞ク殿下(勅命ヲ奉レ来春ヲ以テ改州)
へ面目せるルト(因テ直ニ門下ニ拝謁シ歓レ

銀座 伊東屋製
No. 74 10×20

ク五類ニ接スルヲ得テ欣慨ノ心起リ顧縷ノ言
ヲ発スル能ハス唯留意セサル中否ヲ問フ
ニ遑キス故ニ今日敢テ蕪陋ノ筆ヲ以テ各州
代ヘ故ニテ賀意ヲ呈ス

別紙

夫レ人ノ世ニ処スル已ノ志ヲ達セントスル
ニ過キサルノミ然レ共其志ヲ立ル大州ノ差
アリ其大ナル者ニ至テハ天下ノ得失生民ノ
利害ヲ察シ生民ヲ邦土ニ安ンセシメントスル
其得失利害ヲ察セント欲セハ各州ノ情
態形勢ヲ審ニセサルヲ得サルヘシ

ト欲セハ必ス留学セサルヲ得ス我ト彼既未
各州ト交ヲ結フ日未嘗ニ数年前ヲ以事ヲ彼
ニ人ニ交接シ此州人ニ親睦シ其情態形勢
ヲ察知スルト雖モ所謂踏目撃ニ如クモノナ
ク其地ノ情態形勢ノ真味ヲ知ラントスルト欲セハ其
境ニ入ラスンハ能ハス其境ニ入ラントスル
ハ万里ノ波濤ヲ超ヘサルヲ得ス茫々ヲ以テ卓
識浩大而カラ餘アルノ士ハ既ニ彼州ニ渡
リ此ニ航シ各州ノ情態形勢ヲ察シ其志ヲ達

銀座 伊東屋製
No. 74 10×20

スルヲ得ントス我邦民全数ニ比スルニ殆ト千万人ニ一ニ名アルノミ其卓見無ク武勇モ没勇ナルヲ以テ故ニ無志ヲ達スル能ハサル者往々此ニ出ツ今ヤ殿下勅命ヲ以テ万里外ニ渡海留学セラル天下ノ士羨マサルナシ且ツ卓見超越スルニ非スンハ何ソ此行アランヤ且ツ此ノ大洋ノ隔ル万里ノ地自ラ寒暖異ナルアリ自愛アラン事ヲ伏テ願フノミ

元三ノ如キハ固ヨリ賊誠卓見且ツ廣ク西人ニ接スルニアラス何ソ其情態ヲ知ルヲ得レヤ況ニ国ヲ同ク西州名国ハ心意緻密ニシテ学術技巧ニ精妙ト雖モ君臣ノ大義ニ至テハ我国ヲリハ国ニ超越ス殿下其情態ヲ審ニシ其国風

ヲ躬メ帰朝ノ後我邦多士ニメ益国有ノ義気ヲ養成ヤラレンコトヲ願フハ則チ殿下ノ国学ヤ多士ノ進退ニ関ス多士ノ進退ヤ天下ノ得失ニ関スル所ロ故ニ天下ノ多士殿下ノ此行ヲ賀セサルナク益ノ以テ他日殿下ノ帰国ヲ望ミ有

一行空白

□□漢学

帝国

漢学綸綍去郷須臾蒙九重霜晨密精究文明
辱奉綸綍去郷須臾蒙九重霜晨密精究文明
術夜論細論経去方伯存繁華春秋葉多悲酒盃城
歌吹夜悠揚錦帆休近福州海潮而砌烟望遥

一行空白

□□奉送漢学

国序

太古遺失割愛文物不可得而考也孝徳朝始命高
向玄理等議礼法定冠位置八省百官文武朝勅
藤原不比等等撰定律令而博士伊吉博徳粟田真
人等手修写於是礼儀法制大備矣所謂太宝令是
也其後歷朝俊才俊哲出真歓延喜之間政変文
物燦然迄于徽中興式微大権移武門政令出覇府
百餘年文物日衰衰頽明治維新以復古綱紀
張文物革進非復昔日之比也夫我国文物古盛中
衰而今復盛蓋何年有気運之使然耶将有古今人

不相及耶抑又有所基因耶孟子曰求則得之舍則
失之蓋在求不求耳而其求之如何在選師也顧去
理宜官制不比等之擇律令有所師也何者去理
均德等當面受于唐數年通曉文学礼政不比等為
唐六典以大戎也弘化嘉永間米政通信国勢一
変革府置赤松則良榎本武揚等面受政術洲情有所
大為而會太政復古
朝廷何知求師之不可免
於英於米於佛於独以求其師者日相踵自政度
汎駐劄之使遣留学之士

利
以造工藝農商之支駸々乎進其安進安之極將
変数千年之政俗以同
設国会制定憲法矣由是觀
之我邦之物盛于古者則師唐也盛于今者則師政
米也要留学者之力居多而審考文明之沿革非唯
我邦為然也米之從欧洲々々從羅馬々々從小亜
細亞他山之石可以攻玉是之謂也明治十有八年
一月伊藤伯爵等奉勅留学欧国免余不敏
叨知遇有年于茲豁其將発謹送之曰国家文明自
古取諸海外也而留学者乎有力矣因下此行其任

可不謂重且大哉今世之今之同花所憲法之新
定不遠陛下帰朝之日將奉手舞鳴呼閣下之祖父
海内擯太宗令於前閣下定明治之法於後不唯其
家之家即藤原之喫帝室千八年而君臣相得
之効將見乎此則皇国之所以冠絶宇内加於星
乎明矣星堅上之所以特撰閣下以面望塹国也
歎鳴呼閣下而生今日安知非英海内之靈助之冥
々中哉不啻内之靈助之神実助之矣

列祖有秩斯祐申錫無疆及斯所閣下請勉之

尓

清国陳仁

奉送霞山内閣学士澳国

高橋信言 □□

宿志多年杜鵑遊特特思命向欧洲衣冠不復学
優孟当古人間第一流

壮

送制 町田安原 □□

外々の花は林を出て美わしき君の色香は待ぬ
咲む

原別梅花自西積 吉井友実 □□

霜雪を凌ぎ〳〵て国の花たる梅の風は吹せてよ
きみ

銀座 伊東屋製
No. 74 10×20

一行空白

□□ 霞山氏 衛公因特旨恢遊歐洲甲申十
二月十三日同人相期餞行于胡心長
酔亭戯作此図併題右云 玉堂富貴自画題詩

津田重熙 □□

藤氏古多賢文房西林々果古襲衮職爵位極人臣
富貴豈無天地自有因昔时鎌足公偉功称絶倫
使君春秋富一刻千金身風起翅 明徳志湯盤銘日新
四海皆兄弟各国自為鄰特旨航澳国豈同市蛮人
鵬陰九萬里鉄艦軟火輪只有至誠在胡越可相親
今夜離愁切不厭酒入唇一杯又一杯勸君々須歓

須歓

甲子如陳駒雪幾苦辛他年帰朝日玉堂闌青春
々風君子德道遜下凡民

一行空白

□□ 遊霞山衛公遊澳国

知知慕一郎 □□

浮而欧洲放宿志此遊亭絶有誰知多能兼得詩書
画待見才名冠一時

一行空白

□□ 送別

朝生允懐 □□

何永遠也濃友行と況何ぞさて今の中神の字勢

君

あら海

一行空白

外をかからみなき事大船くあ由く智識を積
てのへら勢

□□郁文社の長近衛篤麿君の言ひせん
とて虚き浪路の厭ひなく墺地利てふ
外へ航せらるゝと甲甚勇ましき
心の程羨しきまなん思えて

井田瑞璞 □□

一行空白

告よ君のらあひあ洋の浪波月墺地利の花のさの
り故ひらひあるは浪風心せよ君を伊船の
書き送る日を

一行空白

□□送別

三谷実美 □□

今よりを君かゝるひの事おへて帰りそ出日待
わ多るの那

一行空白

□□有近衛公洋行之報待は表送別之微意

伊藤 □□

慶應義塾 同 光貞 料容途凡退稀公爵如今推岡
岡損家考日執機観時慧眼辞京去報石丹仁波
海飛家流力爭真督苦辛雕琢珠帰

船浦能子 □□

一行空白

□□送別

愛あくはとくのへりあせ日のなの国の誉仕君

一行空白

序文
後のさうくを

一行空白

一行空白

を惜しく
君の為国の為と思ひ思ひの悲しき別れならはし

とく行き帰りませ七年の後のさうくを今

登名題字

よりそまつ

大伴代名を受て主帰りこむ君と別る今日も

安古甲子

名を受て主帰りこむ君と別る今日も

中場ら舞

ひしおりをり

ひしおりをり

口口さひ西浄の国へ船あし旬山を送りて

太郎舎人季賢

歴代の屋のはのさを神よりり仕なりて香くは

しく紫白の藤原の氏族仰ぎ初ハ安乃人の夢と仰

く其家の主乃君ハ八隅小の大君の大伴言反

さルさしさ外の遠き国辺ハ為はしら詠い

を舞とせさい旅よしあれい綿ハ為の神国

寄らひ先さて京の穂乃上に悲さきちつい行

安らし大丈夫の心振はしねこころみ勤まはし

潜ゝ潜

一行空白

て明日のとお帰りまを待ん

□天地と共に尽せぬ日の女儀

大仰元祝のいやうしまぬか

一行空白

□□霞山所衛に奉へ詔游学于海外恭賦以

吳花在潜　執袁　生涯寺平祝　□□

奉別河梁涙自潜　単身従是幾間関舟輿浩処肉生

鞭車馬飛辺塞満眼天改田懐春一月人求新見路

千山期公忠孝而全日内外高名称九寰

□□所街にのみその学い所政洲へ舟出し玉ふ

我おくるとて　千家尊福□□

一行空白

彼凡ひさそら情さ、む船ることそ君すまなひい

久く孝なるら急行舟へる船路い寄つ波立てよとまつい

功ありけり

様ゝそとよりふるひ家の名れ君明日の当て去

ふ□□く□□

□□近衛君の改洲へ行むる孫ゝとて

急君ゆくまこと路ゝ　千家尊福□□

果いかりけり理

銀座　伊東屋製

No. 74　10×20

一行空白

□□こゝ多ひ都文ゆてふおもの君は墺地利
へ赴き玉ふを送りて　宮根謹三□□
皇國に帰さ、い　の海そゝいあ良　波路ゆ
や守らむ

井田瑞穂□□

生よ君あらひや洋の浪の月墺地利の花のさう
り残あ良ひやのはらき浪風仙勢よ君の御船の
漕渡る日い

前出
五十五枚目
二出ず

一行空白

□□奉送　近衛信篤公欧州　丁野遠影□□

一行空白

神国異児重忠義同盟政来幾人存藤家自古為損
幹華胄於今見本根万里滄溟劃寸北一條黄道変
寒暄仰君勤苦成功後展得雄才報　至尊
□□洋行さる人送るとて　題　河

本辰豊穎□□

場の気の一声夕庭に　聲　思ひきやふりの一むら中
空み原な　政間さ　ひ送てさの横位を出ゆの俳楽彩　大
船の影波に消て　二　多ひみ兄　平　あひ兄　日に
都の門とう待ち良舞会の大御女は千宴の外

銀座　伊東屋製
No. 74　10×20

（マヽ）

旅行のひろ心ゆくやすらなるなほとうの
境を離れ別路は人細き哉おし忘ゆめ寂れ
一言申さむあれは慎をて所く大きなりと況
我とのれほふ様は待おし太平洋の
浅りしら春日ふ船のゆく（き道はあい
一さ ちゃはあらぬされいをのさまく
果なた大きなりと況多つらゐ眼をはと
めは其太平洋いのみ限りなく比路くと況の
心をふ良しめ人のいひも里
縄をを多況ことくこ心ふ多い一切神い

ゆ平洋りて美は の嬢松まちこふと歌いしせく
さのふこ嬢子大中神の多情しつる伊勢山
松まちゆく舞乙人の心をこれ頃なし
をへ言ふこおへて作神くこ日況この国
ふを見やうへ良をやこ兄ふうへり来おこ人日
況待酒ハうれしさ百あ比況て来ひく

○○近藤篤彦の君は歌壇（おしむき弥ふ
はこのれを惜むしろうて

小中村清矩 ○○

○○美の龍のあきとのさまよりしあーやん

一行空白

原文
くるはぶ
埼

みたつみ

一行空白

石ゐこ き美の家つと
老ぬれと君のゆくら舞船路と比かよふ心ハお
くささりくり

□□奉送近街公奉

一行空白

勅撰雪漢之歌

足之石声□□
おは君のこさとかしこ美天雲の向伏遠ちの
外ゐのたたゝにきみ大舟ゐ舵ちせらぬき波
のむと海坂こ見てとさなへかくしいさら漕
君ゐためひるハ恋ぬれ見ちのため寄るハさち
かゝ良ゐ手しくしつと免うそしことつくみの

わさ
ひ手なふと比外ゐのルの方なふと比日のた
比手ふり已まれ恋ふしのねの高山の弟ハやま
しゐ千へのやたふほちや世良くはゆかへりま
せあふきて万太舞

□□近街の君とつゐへ旅ゐ、せ給ふと国侍
りて
切よひるこ心ゆくしと都ゐの首よない得ゐと
きゐ屋り方勢
明さて世ゐ万都者をあふ美見ち大こ国ふりわ
さするなよきこ

穂積富山欽□□

旅ゐ

一行空白

伊東祐命

いさましき春日のうぐいすみこゝろルをゆるハ
君のふなぢなりそ理
年をたほふこゝろ高さのゆるのなを多のふ
ちなを記の木なれんとゝ

一行空白

井関美清

君ちゝは那をならぬ身を西のあのおよつしほ
川心ーてゆけ

一行空白

井上頼国

秋のちゝよくるゝ日のあの大はつりことた
とてよとみしふゆゝなは

一行空白

近衛篤麿公爵の秋のよへ那よないゝ出之ふ
ゝ出之君
とゝ出之君の多はるの西のあくゝ出君の
之のまなひゝと出多ハゝ仲心はしを仲名の出
と篤くセはせ、天地の神世をとくめて多はひ
守り給ていと遠き道ルさりから退さわくはあ
ゝ出平ら出やほ良そくゝ極ゝのなくてを君ゝ義

一行空白

良し

可部最大

佐々木弘綱

汝とよりル高く用ゆる家の風とつ国まて沈ふ
よそつさへむ

一行空白

若うら夢みとしゐ形敢とたしふまてやまれ
ぬる旅衣のな
たひ衣さちわのれうさとのれのなゆまてのく
らぬ君ならなさみ

一行空白

62

□□近衛妙君のこさひ異国へ旅さち給へ子別
きしよせ路たんとそ千家の名はむのへさ
をたへる所

仲国鶴歌子

君う行旅安のれとやしるしこのさやしろこ
みもつとひ

神代名匠

一行空白

作さのなわとのちさとへ陽つと江の名なる
心たのを代
ソたこ国ほやよと許
とル君国行ら舞

戸田忠幸

一行空白

あのため嵐くのりて行君のあとのむいをを
のはてをしられぬ　永田直清

一行空白

帰東てやうてのほら佳山いはよりあふく君
の仰景を　石川默翁

一行空白

囲きりなき大海原し君のゆくみなちらみ
浪毎つなゆ　大不覚知愚暑賦一詩奉送別

一行空白

□□国下瀛州遊学之　学先憂後樂之高義忠岳極
大久保敬斎

一行空白

方今擬〈皇国民員新学堂須疑神聖然翻喜帰来
後序見安和別様春
□□奉送近衛霞山先生留学于瀛州
勢多章之

美人跨馬出京華の里春帆前路遐行到瀛州の無
暫墨江囲月里江花
□□奉送霞山近衛公留学于瀛州
小島猪三郎

単身八里上鵬程序志古瀛在此行須紛他事全帰
途

銀座　伊東屋製
No. 74　10×20

一行空白

日相陸同雲墨陀橋　戸田忠一郎

御命決然脈偶奇千秋受筆在斯行男児固自當
艱苦犯志唯應答

別

聖明風搖白旗奔下馬日池紅海吼長鯨今朝一刺
雲帆遠好報平安維納城

北川七郎

蓬莱岸乾聳五雲端高桂春帆載紫瀾汝藝今朝辞序
閑郁之当日五騰壇荷斯恩寵体明旨憑君和家慚
孝養別後鯨風幾凝眸空浮無際水漫々

神波桓

一行空白

春風吹暖入貂裘年々詔勿為海外遊書劍慶登
大和宮故三月出皇州保蝶良相調金冠果識名公
推黒駒到日渕城須努力年光虚似水東流

松井和武

一行空白

鼎

東嬴旭日麗春光身帯恩光辞序郷風浪千層火輪
轅長風万里錦帆揚光国清望周朝野更待良材作
棟梁偉哉此行四海志胸襟欲納大西洋

早川嘉儀

とつくに国の道成よ左ひの業を（いとくを）へり

銀座 伊東屋製
No. 74 10×20

一行空白

一行空白

あせなうひさなきみ
わ
のうるゝルうれ し の 月 多り 業成へて 帰ゑむ 君
我待んとおれ〳〵 八

松井 秀

峨艨衝濤圭巨鯨特兼〈思命異邦待寇寇雪宾行
才学魯宾塊人稲弟兄多憂春波揺宾夢維城烟月
嘗風情国家柱礎期他日琢磨糞心向日成

序

奉送〈霞山近衛公序 矢土勝之

霸者殘而王道興王道興而学風衰衰而又変者未
知変之所極也夫変也者物之用也不変也者物之

体也唯体不変故有所立唯用能変故有所進斯之
四月〈霞山近衛公奉〈勅協学政所以変通隋時
次供〈廟堂子命之用也〈公家古学台鈞而好学慈愛
士岳以勝之不有時蒙寵待鳴呼生勲何習吐極向
〈国家之宜実而眼底之望也今也游海外文明之
邦有年矣鉅公名士相周旋学識豹変不可測詩曰他山
之石可以攻玉〈公有焉是以勝之之所期於〈公
昔則他年業成乃発其所蘊蓄以施之政治〈君安
於上而民樂於下也書曰凡衆民無所淫州人無有
此德惟皇作極〈公請勉旃若乃急進喜変不思〈

銀座 伊東屋製
No. 74 10×20

是家建国之体則枘鑿牴牾不唯不供其用適足以
禍〈国家而已〈公之聰明自能知之姑獻芻蕘之
言以為送序

一行空白

□□奉送〈公往于豫山公奉
勅留学于澳洲　神奈川信正

一行空白

使濤万里送瑤舟盤踞仍辺是澳洲秋月春花暫惜
別山煙海雨豈無憂委身安寧彩深理存志経綸賛
大猷五蔵待君帰日立恩仍謂十分酬　常盤井鶴太

一行空白

春風吹暖拂征衣況帯恩波辞紫闈力学余嘶仍厭
遠錦帆直載望蘭虎

別紙

□豫山公の送行の序
霞山公性敏捷学ヲ厭ハス〈常ニ公私ノ損益ヲ
斟酌シ一タヒ海外ニ遊ヒ各国ノ風土形勢ヲ歓
ス又其技術政体ヲ察シ彼ノ長所ヲ取テ我短所
ヲ補ハント欲ス〈頃ヲ明治十八年皆月十九日ヲ
以テ
勅命ヲ奉シ墺国ニ赴ントス〈之ヲ聞モノハ各
ヲ知レト知ラサルトヲ問ハス〈皆之ヲ祝セサ
ルハナシ〈生〉
妻ニ何ノ歓晩〈生〉豈之ヲ默ス乎

附スルヤ一言以テ其行ヲ送ラントス行ノ此行タルヤ政治学ヲ修ムルニ非スヤ其大要ヲ約言セハ社会ノ秩序安寧ヲ保有セシルニアリ而メ其之ヲ運動作用スルニ因リテ意表ト雖ドモ同明ハ域ニ進ムヲ得今ヤ本邦ノ開明ハ既実ニ之カ模範タリ行ノ此行尋常一般ノ留学ニ非ル其業ノ遠大ナル生カ論ヲ俟タスメ瞭然タリ蓋シ之ヲ修ムルノ順序手段ヲ得ス身ヲ健全ナラシムル一心ヲ動メテ其業ヲ卒ヘシムルニアリ

行空白

行果メ此説ヲ採用セハ豈単ニ行ノ幸福ヲ生スルノミナラス即チ本邦ノ幸福ヲモ生セヤ行ヲ立ツ之ヲ充ルヽ所ナカレ

原今兄遊欧洲序　津坂英磨

昔ニ是レ陽春暖和ノ候東台墨堤櫻花豊艶ノ時
嘆
聚散別離人生ノ常変何ソ悲シムニ足レ
今ヤ今兄欧洲ニ遊フヲ告ケラル
仔第幼稚
ヨリ風ニ董陶ヲ受ケ教誨ヲ孝セシ高恩アリ常
ニ以視ル所ノ今兄ナレハ独リ此行ニ於テ情
思極メテ堪難シ
帰女ノ態ヲ顧サヽラント

銀座 伊東屋製
No. 74 10×20

欲スト雖モ自ラ禁止スレ然ルニ此花ハ駘蕩ノ春ニメ落花流水縦横子規ノ風ノカ如キノ意ヲ思ヘリ然而シテ此所ヤ古昔王室ノ盛ナル時代ニ非ス我ナカラス中古以来航海ヲ禁メヨリ志士仁人復海外ニ游ヲ得ス然而シテ書翰ニ至リテ誰人ヲ論セス防意ニ庭ヲ得テ日ノ漢土ノミナラス長風ニ駕シ狂浪ヲ破リテ遠ク東ニ渡ヒ別レタニ逢モ亦難キニ非ス而シテ我藤氏ハ皇室ニ於テ甚タ姪カラス他日王室ヲ翼賛シ以テ国威ヲ輝カサンヤ抑何人ヲ以テ欧洲ニ遊カレシ寵栄ハ迂弟等特命ヲ以テ欧洲ニ遊カレシ寵栄ハ迂弟等ヤ法カス阿兄行ケ兄ハ文墨ヲ翫ヒ章句ヲ摘ミ以テ一世ニ誇ル人ニ非ス唯頼フ法ニ拘リテ実ニ疎ク塩文ヲ学ヒテハ世ニ迂ナルノミニ働フナク桜花豊艶ノ日ニ当リテ去リ他年桜花豊艶ノ時ニ帰ラレンヲ希望ス迂弟不肖ノ一言ヲ呈シ以テ阿兄ヲ送ル阿兄モ立一言箇別ノ贈モノアレハ幸甚シ

今別ノ驛ニ他言ナシ海中四十余日ノ間必ス
心所晴明アラン　巽ノハ清栄健適楽ノ度ヲ
ラレ安全他地ニ着セラレンヿヲ祈ルノミ
[illegible]ヒ通学ノ免正國ニおルあき玲女
名残惜おルしい　忠恵

老の身をふ不即うらへてのへりこん世を今よ
とり待ル　こそ　ふ
国ニ仕てゆ　ふ
ふるかこそすれ

送別ノ詩歌文章数十篇ノ多キニ至ル　偏
ニミノ編脱セシモノアレト皆酒肉書ノ上
ヘラレシモノニシテ能ク之ヲ記セサレハ載
セスト今大尾ニ嚴君ノ歌ヲ載セテ之ヲ結
フ　余諸君ノ好意ニ報ヲ時ニ至ル迄朝夕
之ヲ吟弾シ以テ自ラ警ムル所アラン
トスト云爾

霞山学人識